

孝行口説

(一)

凡そ世間に居る人や 貴賤貧富の  
差別なく 親に生さらん人はなし

(口説)

イヤイヤ言やりる如さみ 口説の主取

親に生さらん 人やうらんさ やりばようよう

親に孝行 豊しくするてい 昔の聖人

書物ぬ数々 和歌の概ね 念佛さまさま

戒しみさりしが 人間ならわし 時にゆつてや

素むち腹立ち 大いに勘違げ 怒に巻かして

親に口いし 兄弟諍い あさましむんさみ

胸に思染み 天罰恐りり うとうるしむんさみ

ハイヤーさあつさー

(二) 親や我が身の元なりば 元ゆ忘りる

ことやなし まじや十月になるまでいん

(口説)

イヤイヤ なる程あんさみ 口説の主取

十月の日数や 三百日さみ うぬ間段々

母を苦しめ 生まれ出ずれば 二人の親とも

心や許さん 夜昼困難 衣装かりくり

食べ物色々 言うにや及ばん 夏の暑さや

扇さつとて うしなでいけーなでい

冬の寒さや 抱きかかえて 懐はなさん

風邪にん引かさん くり程さまさま

大切さりしが 人間ならわし 時によつてや

身しち鼻しち 肌ゆふむきば 我親あわてて

手足くん折て 医者ユタ頼どて 神に願立てい

あたら我が身と 替えて病むなと 我子の息災

たき程願ゆる 他には 何の望みん

何の宝んあるまじ

さみさて ハイヤさあつさー

(三)

親うやの生身いちみの時ときなかや 深くふか孝行ここうや

なさなそうて 死後しごうに悔くやんでも益えきはなし

(口説)

イヤイヤ 一々いちいちむつ最さいとうむ 言いやりる如ごとさみ

生身いちみの時とちにや 不孝ふこうしうてい

死後しごうにさまさま 悔くやみ悔くやどてい

銭金じんかねち尽つくしよてい 餅菓子もちぐわしいるいる

飾かざい並ならびてい 祭まちたんてーかー

生身いちみの時とちでぬ 雑炊粥ざーしーけーにん 格別かくべつとう劣りゆさ

またまた くり程ふじょうかなさる 妻女とうじくわに例たといてい

くりや失うしなてい 又またん得いらりん 一度いちど失うしなてい

二度にどとう得いららん 親うやどうやつさみ

子くわの人情にんじょう くりゆ思うむいば ぬんで孝行ここう

粗相すそうに思うむゆが 孝心ここうしんある人ちゆどう

君きみの前めえにん 忠節ちゆうせつ尽つくする 友達どうしほうばい朋輩ほうばいとうん

諸人もろびとうなか中なかにん 和睦わほく交まじわてい 竹たきの子くわの如ぐじょう

行末いくすえはんじょう繁盛はんじょう 幾世いくゆの末すえまで 百々むむ果報がふた絶たゆらん

たつた勝まさとてい うつさふくらしや

ちやがちやが アリイヤサアさあつさー

(四)

昼ひるや夜中よなかも限りなく 子こを思おもわぬ  
時ときはなし くり程ほど深ふかさる親うやの恩おん

(口説)

さていむ んちやまた 言いやりる如ごとさみ

朝夕あさゆわうや我親うもの 思うもゆる念願ねがいや

家内かない治うさむる 年頃としいぐるないねえ 縁えんゆ求むとみて

妻女とじぐわんか迎むかいて 我子わがこの行末ゆくすえ ゆたさるように

神かみや仏ほとけに 手ていやすりすり 念願にんぐわいさりゆし

またまた 世間しけんに出いでい立たち 友達どしいほうばい朋輩ほうばいとん

付つき合あいされしが むしか万まん一いち

悪あしき友達どしいにん 手取てとり引ひかりて 災難わざわい事ことにん

合あいやせぬかと 未まだ目めに見みらん

先さきの事ことまで 心苦こころぐるしく 思うもいんする故ゆえ

一期いちご一生いっしょう ぬーにん限かぎらん 子この為ためにや

思うもわんくとうでぬ あゆみ人ちゆのちや

この事聞こときかりり 親うやの煩悩ぶんのう 子この畜生ちくしよう

世間しきんの色事いろごと かなし我親わうやや 無歳んぞうなむぬさみ

ハイヤ さあつさー